レクリェーションを通して福祉を学ぶ

── 共感できる子ども達との出会い ──

曽　和　光　代

はじめに

神戸親和女子大学（以下本学とする。）では、現在開講している「福祉レクリェーション論」の講座において、春学期、主に講義を行い夏休みに障害をもった子ども達とレクリェーション援助活動を試みた。

「福祉レクリェーション」は社会福祉の大きな構造変化のなかで、いままさに生成されつつある新しい考え方である。生活の「ゆとり」の実現であるレクリェーションにより「生活の質」を高めようとする考えも入り、福祉レクリェーションの具体的な内容とそれが社会福祉の諸領域でどのように展開されていくかを概観され、援助サービスの一環に位置づけられている。利用者、対象者の「生活の質」を高めるために重要な役割をはたすものであり、福祉レクリェーション援助が「何を目指して行われるのか、またその全体像はどういうものかを検討し、併せて援助を提供するレクリェーション援助者のありかたをも考えて行かねばならない。

Ⅰ　実践の方法と過程

実施目的は下記のとおりである。

目的……地域に住んでおられる障害をもった子ども達と共に遊び、衣食住をも共にすることにより、受講学生には障害をもった子ども達にはどのようなレクリェーション活動が必要なのか、等の障害児理解につながってくれることを願い、子ども達には親から離れ、他のお姉さんと共に生活をしてみる、挑戦の心を養ってほしい。その中で、喜び、楽しさが伴えば申し分ない。親の立場からすればレスパイトケアになればと考えて、計画してみた。

レクリェーションは楽しい生活を送っていただくという考えのもとになりたっているので、ＡＤＬ（日常生活動作）のなかで十分に楽しめるレクリェーション財は身近にある。

障害者にとって、特別に活動を起こすことがレクリェーションのすべてではなく、日常生活を楽しむこともレクリェーションの一部である。食事や入浴なども生活のレクリェーション化としてとらえ、対象者の興味、関心や嗜好に合わせて援助していくことが望まれる。

障害者とレクリェーション援助者との関係は「共生」でなければならない。お互いが共に協力をして、共にその時間を有意義に過ごすことが大切である。そのためには、活動を一緒に双方向につくっていくことが大切である。援助もその人にあった援助が必要である。

10人の障害者には、10通りの援助法がある。援助の際には、援助方法のテクニックや内容が優先されるべきではなく、利用者の実態に応じた援助方法と本人および家族の同意による援助が個々に求められる。

まず、対象者とその環境の現在の状況把握（アセスメント）を取り、必要に応じて再びアセスメントをしなおす。

以上のことを考えに入れて、援助者である「福祉レクリェーション論」受講生の学生と利用者である子ども達と家族との間でうまく満足いくものであったかどうか振りかえって見る。

対象になる子ども達は地域に住んでいる障害を

本学教授

もった、学生が関わりやすいだろうと考えた小学1年生～6年生にした。

実施と募集にあたっては神戸養護学校にお勤めの田中一行先生と本学の教員石岡由紀先生に協力願い、一般募集は行っていない。

その他、実務に関することは本学の生涯学習センターでやっていただいた。

題目―「レクでキラキラキラ」

対象―本学周辺の地域住民　障害児小学生1年生～6年生

内訳……小学1年生1人（女子）2年生4人（男子3人　女子1人）3年生2人（男子2人）4年生1人（男子）5年生2人（男子1人　女子1人）6年生2人（男子2人）計12人

日時―2003年5月19日（月）午後4時～

顔合わせ、「お姉さんと何ができるかな」

6月2日（月）　〃

「お姉さんと一緒にやってみよう」

6月30日（月）　〃

「できたよお姉さん」

7月28日（月）　〃

お泊りの事前打ち合わせ

8月5日（火）～6日（水）

前日程

8月6日（水）～7日（木）

後日程

場所―神戸親和女子大学　体育館　学生会館

312号教室　4号館中庭等が主な活動場所

宿泊内容―タイムテーブル

1日目（8月5日）（8月6日）

13：00……リーダー集合

13：30……学生集合（お姉さん）

14：30……参加児童集合（学生会館和室）

14：45……室内遊び（3号館・312教室）

＊ ボールプール

＊ トランポリン

15：30……おやつ（3号館・312教室）

15：50……プール遊び（4号館・中庭）

クラフト（3号館・312教室）

17：30……シャワー

18：30……夕食（学生会館食堂）

19：15……自由時間

20：00……就寝準備（学生会館和室）

21：00……消灯

21：30……リーダーミーティング

2日目（8月6日）（8月7日）

7：00……起床

7：30……朝食（学生会館食堂）

8：30……散歩

10：00……自由遊び

11：30……昼食（学生会館食堂）

13：15……音楽セラピー（3号館・312教室）

13：45……お迎え（3号館・312教室）

14：00……解散

14：30……子ども達が帰ったあと、学生は後片付けを済ませレポートの作成

16：00……レポートを提出、解散

学生の役割分担

学生参加人数―本学福祉臨床学科1年生56人

全体を把握するリーダー……8人

その他の学生は子ども一人に学生4人の割合で支援活動に当たってもらう

8人のリーダーには全体のプログラムの流れをスムースに進める事ができるように動いてもらった。あとの学生は子どもの支援活動に当たり、それぞれのグループでの役割を果たしてもらう。子ども1人に4人の学生がいるので下記のように分担を決めた。

1日目

時　間	項　目	リーダー	1	2	3	4
13：00	リーダー集合	和室				
13：30	学生集合	和室				
14：30	参加児童集合		312教室	荷物	薬	お迎え
14：45	ボールプール トランポリン	おやつ用意	ボールプール・ トランポリン	プールの用意	クラフトの用意	プール着替え 手伝い
15：30	おやつ		片付け	プール	クラフト	
15：50	プール or クラフト	食堂	シャワーの用意	片付け	片付け	
17：30	シャワー		シャワー			
18：30	夕食		食堂 子どもとともに 食事後移動	食堂 夕食の片付け	食堂 子どもとともに 食事後移動	食堂 夕食の片付け
19：15	自由時間					
20：00	就寝準備			トイレ・洗面		着替え用意
21：00	消灯					
21：30	リーダー ミーティング	ラウンジ				

2日目

時　間	項　目	リーダー	1	2	3	4
7：00	起床	朝食 買い物	布団片付け	トイレ・ 洗面		着替え用意
7：30	朝食	食堂	食堂	食堂	食堂	食堂
8：30			子どもとともに 散歩			子どもとともに 散歩
	おやつ	おやつ用意		プールの 用意	クラフトの 用意	
10：00	あそぶ	昼食用意	荷物片付け	プール	クラフト	昼食用意
11：30	昼食				子どもとともに 食事	
			荷物移動		薬を返却	
13：15	音楽セラピー	音楽セラピー				
14：00	解散					

学生への課題

子ども達と共に過ごしたプログラム終了後311号教室にて事後指導とレポート提出

プログラム運びの反省と評価、今後の課題についての話し合いと報告。子ども達の欲求を充分に満たせたか、自分自身も子ども達と楽しめたかを、マズローの欲求五段階説に添ってのレポートを提出。

マズローについては福祉レクリェーション論の授業で講義終了している。

マズローの欲求五段階説

①生理的欲求……飲食物、睡眠、性などに対する欲求、安楽に生命を維持していくため基本的欲求

②安全や保障の欲求……厳しい自然環境から逃れたい、恐れや不安から逃れたい、自己保障の欲求

③社会的欲求……集団に所属したい、愛情や友達が欲しい、他人と意味のある関係をもちたいという欲求

④承認の欲求……人から尊重されたい、尊敬を求める欲求、他人からの承認を求める欲求

⑤自己実現の欲求……自分の可能性を実現したい、潜在能力を最大に発揮しようとする欲求、理想の実現

以上がマズローの5段階説であるが、我々人間は生理的欲求のみを満たされてもそこに生きがいはなく、人と人との間で相互に認められながら生きられる存在ある。福祉レクリェーションの基本的な考え方は、各々の価値観やライフスタイルを尊重しながら、「その人らしさ」を支援、援助し、高次の欲求へとつなげていき、生活の質の向上を目指すところにある。よって、A.H.マズローは、人間は段階的により高次の欲求充足に向けて動機づけがなされていくと説いている内容が援助活動をしていくに必要な三つの生活領域にA.H.マズローの欲求五段階説が示す欲求がはいってくる。

生活の三領域

1）基礎生活……我々の生命維持に必要となる生理的欲求・安全欲求を満たす生活領域（睡眠・食事・入浴・排泄など）

2）社会生活……我々と他者や組織とのかかわりの中から所属欲求や承認欲求を満たす生活領域（通学・通勤・仕事・諸活動など）

3）余暇生活……我々の人生に潤いを与え、新たな自己発見や自己開拓へ導くための自由な時間であり、自己実現満たす生活領域（趣味活動・読書・散歩・スポーツ・音楽などの静的・動的な余暇活動）

以上の面を考慮に入れ、子ども達それぞれの保護者に報告書と学生それぞれが、関わった子どもの生活面について記述してもらい、その文章のなかからピックアップして生活の三領域に整理した。

Ⅱ　結果の考察

（1）支援者の立場に立った学生側からの一考察

学生のレポートより整理した三領域を肯定的であると思われるものと、そうでないと思われる面とこちらで判断して分類した。

1）基本生活面

①衣服の着脱など

＊支援の必要無し

・自分の身の回りはする。
・手伝うが自分でするところもある。
・自分のことは上手にする。
・自立できる部分は自分でする。
・着替えは自分で、できる。

等の結果報告があり、

その他としては、・着脱は一人で出来ないが「ばんざあーい」というと、手は挙げて協力してくれるので着せるときに助かる。・時々手伝う。等が2件、大半の子ども達は支援の必要無く自分でしてくれている。

②食事について

＊支援の必要なく、食事を楽しんでくれた。

・食事は満足して食べてくれた。
・笑いながら機嫌よく食べてくれた。
・振りかけをかけてあげると、喜んで食べてくれた。
・食事の時は自分で行動してくれる。

・食事に関しては困ることはなかった。
・ご飯のときは笑顔一ぱいで幸せそうであった。
・「いただきます」・「ごちそうさま」も自分から表現してくれた。
・食事は食べきれない子の分も食べてあげる位しっかりと食べてくれた。
・手で食べるときもあるがスプーンも使ってくれた。
・「ご飯」、「おかず」と順番に食べてくれた。
・かなり食事は自分で食べてくれた。
・一人一人楽しく食事ができていた。
・汁物、スープをたくさん飲んでくれた。
・おやつも楽しそうに夢中になって食べていた。
・食事はよく食べたので少し過食の心配をした。満足そうな笑顔でした。
・食事はご飯もお汁もお代わりするくらいよく食べてくれた。
・ご飯は特に好きでお代わりを何回もした。
・ゆっくりと美味しそうに、ごはんを食べてくれた。
・笑顔で皆に囲まれて食事をしてくれ、会話ができた。

等の項目があがっており、

その他、食事の支援が必要、食品の好き嫌いがある。等については、・好き嫌いがはっきりしていて嫌いな物は食べない。・メニューが気に入らなくて持参のバナナとバームクーヘンしか食べなかった。・食べ物を少し小さく切っておくと難なく食べてくれる。・初めタイミングよく口の中へ入れてあげれない時もあったが、たくさん食べてくれた。と、3人の子ども達の様子が上がっていた。大半の子ども達は食事を学生と楽しんでくれた。一人昼ご飯の時、食べ物をひっくり返そうとした子どもがいたが、ゆっくりと、様子をうかがっていると、学生との別れがいやでその子なりの表現で訴えてくれていたのがわかった。楽しいひと時であったことは学生とっても、嬉しかったことであろう。

③就床について

＊よく寝てくれた

・11時頃には寝てくれて、朝までぐっすりと睡眠をとってくれた。
・寝るときは「一緒に寝よう」と手を引っ張って寝床まで連れて行き、添い寝をするとすぐに寝てくれた。満足そうな寝顔であった。
・夜は疲れて走り回ることなく寝てくれた。
・夜はぐっすりと寝てくれた。
・夜は一番に寝てくれた。
・すぐに寝てくれて、朝まで熟睡した。
・あまり手がかからず遊び疲れて寝てくれた。
・夜はぐっすり寝てくれた。

その他、環境が変わって、なれないのか、昼に遊んだ興奮が覚めやらないのか、なかなか寝てくれない子が4人いた。・興奮気味で走ったり、跳ね回ったりするので少し一緒に遊んだ。部屋にもどらず、遊び疲れてラウンジで寝てしまった子が1人。・夜寝る時は、テンションが高く、皆なと、合わせることなくふとんの上を動きまわる。・なかなか寝てくれない何処かへ走っていってしまう。・寝てくれないので、石岡先生に寝かしつけるのを助けてもらった。等、はしゃぎ回る子もいたが午前3時には全員寝た。

④排泄・洗面・シャワー・薬をのむ。

＊支援の必要なし、声かけをすれば自分でしてくれる。

・自分でトイレに行く。
・「おしっこ大丈夫」と、声かけをすると行きたいときは自分でトイレに行く。
・トイレは一人でいけた。
・「おしっこ」と言ってくれたら、車椅子でつれて行くと自分でしてくれた。
・プールや寝る前はちゃんとトイレへ行ってくれた。

その他、支援の必要な子どもが一人いた。紙おむつの交換である。・体調を崩していたので、おむつを変えたとたん出てしまうので大変でした……(笑)・お茶を飲まないので便秘を心配、と出ない子どもへの気配りも感じられる報告もあった。

全体的には車椅子の子どもも、出来る限り自分でしようと努力してくれる。

・洗面やシャワーも自分でしてくれた。
・歯磨きも自分でしてくれた。
・手洗い等も楽しそうに洗ってくれ、シャワーも自分で体を洗っていた。
・髪を洗うのはいやがっていたが、シャワーは楽しんでいた。
・薬も嫌がらずに呑んでくれた。
・薬も苦いが自ら手をだして呑んでくれた。
・薬は自分で呑んでくれた。
・薬を呑むことや、バンソウコを貼るのを自分でやってくれた。

たいていのことは自分でしてくれているようだったが、一人、汗をかくことが出来ない子どもについては、暑かったり、興奮したりすると熱が38℃をこえることがあるのと、常備薬を必要としている子どもの健康面についての管理は、常にこちら側が気おつけておかなくてはならないことである。

2）社会生活面

＊他の人と交流をもつことをよろこぶ。
・自分から積極的に話すことを喜んでいた。
・学生との関わりを喜んだ。
・お喋りが好き。
・多勢での人との関わりを喜ぶ。
・一生懸命に話しかけてくる。
・学生をさそって何かをしようとする。
・手をつなぎに自分から来てくれる。
・抱いてやると自分から抱きついてきた。
・食事の時、皆と歩調合せて「いただきます」が言える。
・しては「ダメ」と言う事に対しては、その動作はしない。
・興味ありそうに誰かをじっと見つめて、何か伝えようとする。
・畳の部屋でゴロゴロしながら話しをすると、喜んだ。
・言葉を理解してやり取りができた。
・こちらの要望も聞いてくれる。
・学生と一緒に音楽セラピーを楽しんでくれた。
・手を握って、好きですよ遊んで、という行動をする。
・いつも誰か関わってほしそうである。誰もいない時は不機嫌である。
・何かほしい時は、手を引っ張っていき「ジュースがほしい」と言う。
・何かしてもらうと「ありがとう」と礼を言ってくれる。
・問いかけに対しては、答えてくれる。
・こちらの要望も聞いてくれる。
・自分でやりたい事は相手に伝えてくれる。
・困っている子に関わって、助けようとしていた。
・自分が絵本を読めることを認めてほしいと願っていた。
・帰りには、手を振って、最高の笑顔を皆なにくれた。
・別れが悲しくて不機嫌な表情で皆なに知らせた。抱くと機嫌をなおしてくれた。
・母親が迎えに来て、別れる時は大粒の涙を流してくれた。

その他、人との交流を嫌がる子どもが二人いたが、・他の子の叫び声や奇声を聞くと耳をふさいでしまう。・こちらの言葉がけに反応しない。・いやな音や声を聞くと一人で外へ飛び出してしまう。

この子達は彼らにとって良い条件の環境においては、比較的安定して皆と一緒にいてくれた。

社会面においては、大半の子ども達は他の者との関わりを望んでおり積極的に何らかのかたちで行動している。

3）余暇生活面

＊プール、水遊び
・プールは喜んではしゃぎまわっていた。
・プールは嬉しそうな表情、笑顔だった。
・滑り台プールが好きで何度も滑っていた。
・プールやシャワーが好きで、やめると嫌がる。
・バケツやジョーロで水遊びをするのが好きで、水が流れていくのを見て笑顔だった。
・ホースを見つけて自分にかけたり、他の子にかけたりして楽しんでいた。

＊ボールプール・粘土

- ボールプールは中に入って居心地よさそうにしていた。楽しそうだった。
- 粘土に興味を持ってくれてよかった。

＊音楽セラピー

- 音楽セラピーは楽しそうだった。
- 部屋で走りまわって楽しそうだった。
- 鏡を見ながら色々なポーズをとっていた。

＊その他

- 公園のブランコで楽しそうに遊んでくれた。
- 歩くことが好きで、散歩を楽しんでくれた。
- 庭の砂利で遊んでいた。
- 廊下に置いてある血圧計を何度も押すのが好きで、声出して喜んでいた。
- 音楽セラピーの時間ではないが、ピアノを弾いてあげると手をたたいて喜ぶ。リズム遊が好きで、楽しんでくれた。
- 寝る前に絵本を読んで楽しんでいた。
- ふとんのシーツなどに潜って「キャッ、キャッ」と声をだして楽しそうに遊んでいた。

プールが好きでない子が一人、他の遊びをして時間を過ごしていた。水遊びは好きであるが、身体的に長くみずに入っていると唇が青くなってしまい本人の意思に反してやめなくてはならない子どももおり不満そうであったが、大半の子ども達は水遊びが好きであった。また、粘土では口に入れてしまう子どももいたが、小麦粘土なので身体には支障なった。他の遊びも楽しんで過ごしていた。

（2）学生の障害児に対する理解と自己評価

理解できたと思われる事柄

- ダウン症の子どもは自己中心で我がままと勝手に思っていた。子どもと接して自分で沢山のことが出来ることが活動を通してわかった。
- 一人一人個性があり、好き、嫌いがはっきりしている。
- 大泣きしたとき、お母さんのアドバイスを思い出し対処した。大変だったが成功した。お母さんの苦労が少しわかった。
- 自閉症の子どもさんとかかわったが、行動や考え方がよめなくて困った、活動を共にして、少しわかった。しかし、我が子と向き合うお母さんを見てさすが、「母つよし」とおもった。
- 障害をもった子どもへの間違った先入感を持っていたことに、気づいた。そうゆう意味でこの体験はよかった。子どもが何をしてほしいのか、わかった。
- 活動を共にして、気にいった遊びを見つけることが出来たとき、こちらも安心出来た。
- 食事の時何が好きなのかわかり、しっかりと食べてくれたたきは安心した。お茶やおやつも食べないと、便秘にならないかと心配した。
- 子どもの表情、気分が良いのか、悪いのか、楽しそうか等、顔や行動、身体表現よりよみとることの大切さがわかった。
- 障害をもった子どもと接する大変さもあるが、楽しさ、喜びをこのレクリェーション活動で体験した。
- 障害をもった子どもには特に何が好きなのか、個別のレクリェーションが大切なのがわかった。
- かかわってみて、自閉症の子どもの特徴が少しわかった。思っていたより何もかも自分でしてくれた。
- 興味ありそうに誰かを見つめ何かを伝えたそうに、しているのがコミュニケーションのとりかたなのだということがわかった。
- 嬉しいとき、悲しいとき、満足、不満足の顔の表情がわかってきた。
- 昼夜関係なくテンションが高く夜も1時位まで起きていて寝不足を心配していたが、「子どもがそれだけ興奮することは、それだけ得ることが多かったのだと思う。一日ですごく成長するときもあるのよ」と言われたときは、そうなのだと納得したと同時に疲れもふっとんだ。お母さんは凄いと思った。
- 悪いことをしたら怒る。良いことをすると褒めるといったように、今までは悪いことをしても「しょうがない」とほっていたところが、しっかりと怒れるようなって、「嫌がる事はしない」、

「何がこの子にとって良いのか」と考えられるようになった。

- 福祉レクリェーションの授業で感じていたが、この活動でおなじ人間であり、余暇を楽しむ権利があるとおもった。
- 自閉症の子どもが初めての場所に来たら、周りの様子を見ながら、走り回ったり、たしかめながら歩いていることが、行動を共にしてわかった。
- 知的障害をもった子どもとの接しかたが少しわかった気がする。
- 手をつないでほしい時、抱いてほしい時、等の表情が少しわかってくると、疲れていてもすごく嬉しい。
- 子どもと向き合えて会話ができたと思う。こちら側の注意することも理解してくれた。
- 正直にいってとても疲れた。お母さんは毎日この生活をしているのだが、すごいと思った。しかし、寝顔を見るとホッとした。
- 音楽セラピーの時、子どもに戻った感じで一緒に楽しめた。表情や特徴が見えてくると、どうやったら楽しめるか、が少しわかり、子ども達の楽しそうな顔を見ていると、いつのまにか自分もたのしくなっていた。いい経験をしたと思う。
- 相手のいやがる事をした時、又された時の対応の仕方も少しわかった。嫌そうな表情をしないで、はっきりと注意をするとやめてくれる。
- 水遊びの時、服がずぶぬれになってしまったが、本人がとても楽しそうにしてくれたので、ぬれる事などどうでもよくなった。
- 部屋の電気の確認、押し入れ物置等の中の点検など色々な場所の点検をして自分の居場所の安全を確かめていることがわかった。
- 自分がいいかげんな気持ちなら子どもは心を開いてくれない、自分が一生懸命なら心を少しずつ開いてくれるのがわかった。
- 元気な笑顔と素直な気持ちを目で見るだけでなく、心で感じ取れたような気がする。
- 子ども達は、人の心と態度を見る目があってごまかしは無理だとわかった。
- 障害の度合いによって、スムースに支援活動ができるばあいとそうでない時があり、支援活動の難しさを身もって感じた。
- 言葉が話せない分、何をしたいのか、何を求めているのか理解するのが本当に難しいとおもった。
- 人と人とのコミュニケーションは障害を持っている人達にも大切なことで、言葉がなくても一緒にいれば気持ちは伝わったように思う。
- 言葉表現がないので不機嫌になると何かこちら側に伝えたいのだなと、いうことがわかった。
- 満足に支援出来ていなかったにもかかわらず、別れるのが辛くって泣いてくれた時は嬉しくて、こちらももらい泣きをしてしまった。
- 別れるのがいやで不機嫌になって泣いてくれたのは嬉しかった。本当に一緒に過ごせて良かったとおもった。この合宿で良き体験をしたが、障害を持っている人達にとってもっと生活のしやすい環境を作ってほしいと思った。
- 正直、初めは不安な気持ちがあったが、行動を共にすると全然そんなことはなく、嬉しい時はすごく嬉しそうな顔をし、機嫌が悪い時は態度や表情から読み取ることができ、障害を持っていても私達とかわらないとおもった。
- この二日間の合宿を通じて、その子の性格や人間性が見えてきて、どのように関わっていけばよいか考えさせられ、とても有意義なものになった。こんな機会が増えてほしい。
- 子ども達は迎えにこられたお母さんの顔を見てほっと、していた。子どもにとってお母さんの存在はかなり大きいものであると思った。
- 二日間大変だったが、毎日関わっておられる両親や家族はもっと大変だなあと思い、これはやはり愛だと感じた。大変であるが母親は子どもから最も信頼されているのだと、お母さんが迎えに来られてわかった。
- 最後に「ありがとう」と言って帰って行った時は感動した。
- プールの用意や子ども達の遊び相手で筋肉痛に

なってしまったが、水でびしょ、びしょになって喜んで遊んでくれる顔に最後までやりぬく力をもらった。
- 食事の時美味しそうに食べてくれると自分も幸せになった。
- 言葉が分かりコミュニケーションの取り方がわかるようになった。初めてのことばかりだったが、良い経験になった。こんな機会があればもう一度やりたい。
- 別れる時「お姉ちゃんありがとう」と言ってくれた時は嬉しかった。

以上、学生が支援活動に当たって子ども達と接して何かを感じ取ってくれた面であり、これが、障害児理解へとつながってくれればと考える。

又、学生が支援者として充分に尽くせなかって点や自己評価も書いているので取り出していくと、次のようになる。

自己評価と今後の課題
- 意思の伝達がうまくゆかなかったので、申し訳なかった。
- 環境が変わりご飯を口にしてくれない時にどうしたらよいのかわからなかった。
- 薬を呑み忘れないように、神経をつかった。
- ご飯を食べている時、お腹一杯で首を横に振っているのか、何を食べたいのかわからなかったのが本当にくやしかった。
- 接しかたがわからなくて、しょっちゅう戸惑った。
- 福祉に対する考え方をもう一度見直していきたい。おしめがぬれている時など、早く気づいてあげられなかった。反省。
- 分からない事ばかりで、手探り状態でした。
- 充分なことはできなかったが、我々に出会えたことが子ども達にとってよかったと、思ってくれていてら嬉しい。
- 子どもをあずかるのは、不安だった。
- 夕食は食べてくれないし、夜は全然眠ろうとはしないので、責任を感じて自信をなくした。
- 考えていたより辛かった。プールの準備あたりから疲れ、逃げ出して帰りたかった。
- 水の危険性について、水面の高さに気お付け子どもから一瞬でも目を離さないように気くばりが必要とかんじた。
- シャワーやご飯を食べる時も頭を打たないように気をつけた。
- 排泄の時「トイレ」と言えないので、できるだけ早く気づいてあげる事が重要だと反省した。
- 車椅子に乗っている時もタイヤに手をはさまないように安全面に気をつけた。
- 車椅子でトイレに入った場合、介添えさんも一緒に支えながら入るのでもう少し両サイド広いほうが良い。(学生会館１Ｆ障害者用トイレ)
- 大変な事が多くて正直疲れた。
- 扉のところで、外に出て行こうとする子の安全面を管理する役だったので疲れた。
- この関わりは一部でこれから頑張って勉強しないといけないと思った。
- 食事の時の支援が下手でこぼしたり、よごしたりしてしまった。食べやすいようにご飯が運べなかった。
- 怪我をさせる事無く過ごせたのがよかった。
- うっかり非常ベルを鳴らされた時はびっくりした。
- 正直にこのかかわりは疲れたが笑ったり、楽しそうにしてくれたことが本当に自分も楽しむことができた。自分も笑顔になれた。
- 子ども達のかわいい寝顔をみると頑張ることができた。
- 最後のお別れは寂しかったが、大変だったことを忘れ、こみあげてくるものがあり、幸せな気分になれ、楽しさだけがのこった。将来にうまくつながってほしい。
- 人任せにしないで、自分で責任をもって支援していかなくてはとおもった。
- 体力がなくなってくると笑顔がなくなってきたので、自分をきたえなくってはと感じた。
- こちらから、進んで話し掛けるようにして、笑顔で接するように努めた。
- 寝る時は強引であったが、一緒に寝転んでいる

と寝てくれた。

- 「シャワー嫌い」と言ってシャワーを浴びてもらえなかった。何が気にいらなかったのかわかってあげられなかった。
- 子供用の便座がないので高すぎて使いにくかった。
- トイレを使用したあとに流すところは操作しやすいものに変えるほうが良いと思った。

以上が学生のレポートよりできるだけ学生の文章を変えないで表現してくれたものを抜き出した。子ども達の関わりは大変であったが、戸惑い、疲れ、怒り腹立たしさ、逃げ出したい、思い直し、わずかであるが自信がつく、喜び、幸せ、等感情の揺れ動く中、勝ちとってくれたものがあるように思われる。充分に子ども達に支援ができていない事も、感じて、まだまだ、これから勉強し体力もつけ福祉とは何かを学ぼうと言う姿勢になってくれている事は有難い。

今回の対象が障害を持った子ども達であったので本学での実施は施設の面で学生からの指摘もあったように大変使い勝手が悪いことは確かであった。そのなかで、精一杯頑張って支援活動をしてくれていたことを認めたい。

（3）保護者からのレポート、及び合宿について

この部分はこの合宿にあたりアドバイザーとしても参加していただき、保護者との連携を保ちながら障害児教育に現在も携わっておられる神戸養護学校の教諭田中一行氏にまとめて頂き、アドバイザーとしてこの合宿についてまとめをお願いしたものである。

※将来、福祉に従事する学生に体験してほしいレクリエーションについて

1）母の感想から

- ○○の事もわかってもらえてきたのに、これで終わりというのは残念です。○○もきっと「また行きたい」とずっといいそうです。
- 「オネーチャン」といるのは本当に楽しいといた感じで、迎えに行った時も布を巻いてアンパンマンになったまま、母をチラッと見ただけで、お姉さんと一緒にトイレに行ってしまいました。帰宅後もよく「オネーチャン」を連発していました。
- 普段出来ない兄弟孝行が出来たことを感謝いたします。また機会があれば、レクリェーションのサークルをしていただきたいです。
- 1泊2日で学校とは違う場所、学校にはいないお姉さん達と過ごすことが出来て良い経験になったのではと思います。○○のペースにあわせて活動も変更してもらったみたいでうれしかったです。こんな機会があればぜひ参加させたいと思います。
- 怒られて泣くことはあっても帰りたくないと言って泣いたのは今回が初めてです。また、○○の泣いている姿を見てお姉さんも貰い泣きをしているのを見て、お姉さん達もこの2日間で感じてくれる事があった様でよかったと思います。
- 回を重ねるごとに、言葉がなくても子どもの態度を観察する事で、コミュニケーションが取れるという事がわかってもらえた様で、重たいにもかかわらず、おんぶ等もしてくれたり、ほんとうにがんばってくれたと思います。
- お泊りまであって、○○も私も息抜き？！することができました。
- ○○自身、あまり面識の無い人の中で、どうコミュニケーションをとっていくか、関わりを深めていくかを体得することが出来て、とてもいい経験をさせていただくことが出来ました。我が子中心の話になってしまいますが、てんかんがあると扱いが解らないのでボランティアを断られたこともしばしばあります。（学校の先生にもよく知らない人が多いのですが……）福祉の中でそういった病気のことも少し触れていただけたらありがたいです。実際、障害児に対するボランティアは少なく、福祉と言えば老人と言った感じにかたむいている傾向があるように思います。これからの福祉にたずさわる学生さんに期待を寄せている親の一人です。これから

もこういったセミナーを続けていただき、障害児に対する関心、親の思いなど理解を深めていただけたらと思います。

2）学生の感想から

- この前までのレクでキラキラは単に遊ぶだけだったけど、今回はお泊りということで生活も一緒にすることになり、その点、不安なことが、とてもありました。
- 今までの授業とちがってお泊りだったのでとても緊張しました。本当にはじめてのことばっかりで、嬉しい事もあったけど、どうしていいんだろう？と考えることが多かった。

学生は感想の中には、書き出しの部分にこの様な感想を記しているものがある。そこには、初めて障害のある子どもと一晩共に生活することへの不安を感じ取ることができる。

しかし、障害のある子どもと一晩を過ごした学生達は実に81％の「本当に貴重な体験ができたと思います」「参加してよかった」「私たちにとっても得ることが多い１日でした」といった様なプラスの評価を記している。何がそのように感じさせたのだろうか。

学生の感想を続ける。

- ○○くんと出会えて、私にとって、これからの学生生活を送るうえで、プラスになることばかりでした。
- 今までの90分授業の時も○○君の事を少しはわかっていたつもりだったけど、実際１日中一緒にいて全然分かっていなかったと思った。○○君は90分遊ぶだけでも半分は昼寝をしていたから、そんなに活発に行動しないと思っていたけど、大きな間違いだった。
- 始めの頃は○○ちゃんのすることがよくわからなかったりしたけど、このお泊り会では、○○ちゃんのしてほしいみたいなことが、少しは分かった感じがしました。
- いつもはお母さんや先生にしか向けない笑顔を向けてもらえた事が凄く嬉しかったです。きっと今迄、私が心の底から○○ちゃんと向かい合っていない所があるって○○ちゃんは感じたから、見向きもしなかったのではないかと思いました。
- 自分がいい加減な気持ちなら子供は心を開いてくれないし、自分が一生懸命なら心を少しずつ開いてくれているんだなぁとおもいました。

これらの感想の中には様々な思いが凝縮されている。一緒に食事をし、布団をひいて隣で寝る。トイレに誘ったり介助したり、一緒に遊んだり。時間にすれば24時間。たった１日だけのことである。しかし、その１日が大変重要で、その１日によって学生の心は大きく揺さぶられている。学生の心に届く、感じさせる力が障害のある子供たちは秘めており、それを感じさせるプログラムであったといえる。

どんな子なんだろう。どうやって遊べばいいんだろう。何を考えているんだろう。どうやってコミュニケーションをとればいいんだろう。最初は驚きと戸惑いの連続だったと思われる。障害のある子供と学生が初めて会った日は、ひとりの子どもを５人の学生が追いかけるという感じだった。そんな学生も徐々に子どもを理解し子どもも場所や学生になれ、落ち着いて遊べるようになる。親のいない宿泊となると子どもは、知らず知らずのうちに学生を頼る。それは言葉だけではなく、様々なサインとなって現れる。そのサインは学生にも通じる。自分が頼られている存在と学生が気付く。学生のアプローチに子どもが応える。コミュニケーションの好循環が生まれる。

このような体験を経ることによって、学生は自分の考え方、価値観の変化、福祉や障害者に対する考え方の変化に気付いている。

- 私は障害を持った子どもに間違った先入観を持っていたことに気付きました。
- 今まで福祉といえば老人という考えで、今までのボランティアすべて老人ホームに行っていたので…。

・もっと幅広く、福祉について考えていきたいと思います。
・子どもたちの寝顔を見ていると、隣で寝ている同級生と同じなんだなぁと思いました。食べる時もしっかり食べ（私たちよりたくさん食べているのには驚きました）おむつは使用するけれど排便もまったく同じ、同級生と共に遊んでいる子どもたちも、同じ人間であることを今までの福祉レクリエーションの授業より強く感じることができました。

自由記述形式の感想の中で、自分の考え方の変化に言及している学生が17名（32%）。単に感想に終わらず、自分自身の考え方を振り返り、福祉に対する目を育てているといえる。

さらに感想の中には次のような内容がある。

・この1日でも私達はすごくぐったりしてしんどいの連発だったのに、365日一緒のお母さんはすごいと思いました。
・はじめは5人もいるからと思っていましたが、5人しかない事に気付き、又親はそれを1人でしているのだと思い本当に大変だと思った。
・お母さんの大変さが分かり、お母さんに尊敬の念をもってしまうぐらい、お母さん（ご家族の方）はすごいと実感しました。

障害児と一緒に暮らす家族、中でも母親の苦労、大変さを言及するものが12名（23%）いた。

このことは、「福祉」「福祉」というけれど、「何を」、「誰を」、支援する必要があるのか。そのことを学生が肌で感じ取っていることを現しているものだと思われる。本人の支援の必要性、その支援の仕方、それだけでなく、その家族の方への支援が必要である。家族への適切な支援ができて、いい家族関係が保たれる。これは障害者も高齢者も同じ。障害者や高齢者が地域で暮らすということは、その本人だけの支援ではなく、その家族も含めた支援が必要だということを学生が身を持って感じていたといえるのではないだろうか。

3）泊をともなう実習の必要性と実施のポイント

泊をともなう実習はリスクが大きい。「準備の大変さ」「安全確保の大変さ」「健康維持の大変さ」とにかく大変である。障害に対する基本的な知識が必要になる。コミュニケーションの取り方が大切になる。食事の介助、トイレの介助、そして何より、とっさの時の対応の仕方の知識が必要となってくる。これらを学生に徹底しなければならない。そのための準備は本当に大変である。しかし、大変だからこそ得るものも大きい。学生を本気にさせ、感じさせるものがそこには存在する。

4）学生に提供する情報

ア　実習の目的

何をおいても大切なのは、「なぜ実習をやるのか」その目的を明確に伝える事である。今回の実習の場合は3点。「1．学生自身の学習・体験の場」「2．障害児本人の楽しいレクリエーションの時間」「3．保護者のレスパイトケア」この3点をしっかりと押さえたい。

「1．学生自身の学習・体験の場」、自分達のかけがえのない学習の機会なんだ。こんな機会は滅多にないんだ。自分たちに与えられたチャンスなんだと学生達が自覚することがまず第1である。

「2．障害児本人の楽しいレクリエーション体験」、その機会を学生自身が自分のものにするためには、対象者（障害者）「楽しかった」と感じるレクリエーションの支援をできる必要がある。楽しい、豊かな時間を過ごしてもらうことが、ここでの支援の目的である。

「3．保護者のレスパイトケア」、その支援は障害者本人のレクリエーション体験だけに止まらず、その保護者のレスパイトケアに繋がっている。その支援もしていることになることを伝えることで、単に実習ということだけでなく、社会に役立つ自分を感じるのに繋がってくる。

イ　障害に対する知識

これは、細かく言い出したらきりがないであろう。行事のプログラムの中で、必要な知識。安全確保に必要な最低限度の知識を紹介する。

参加者の障害の特徴。今回ならば、知的な障害者なのでその大まかな特徴が必要である。ダウン症は…、自閉症は…。医学的な知識よりも、その行動特徴を伝える必要がある。どんな遊びが好きか。どんな遊びなら成立しやすいか。コミュニケーションはどうやってとるか（これは個人差が大きいので、実際に体験しないと分からないが、言語コミュニケーション視覚的に優位といった内容）。困った行動・注意を要する行動（自傷・他傷・異食・パニック・突然走り出す）こういった内容を事前に学習し、障害児と接する中で、その障害に起因する行動を理解する中で宿泊に結びつける必要がある。

この部分（障害児と接する中で、その障害に起因する行動を理解する）を抜きに宿泊を実施するのは無謀である。事前の知識と共に、学生が肌で障害を受け止めるプログラムを用意する。学生が、知識だけでなく、感覚として障害児の特徴を理解できるように段階を追ってプログラムを進める必要がある。

5）実習に組み込みたいプログラム

何を置いても重要なのは次の2点である。

①学生と障害児の直接関わる時間

②学生が保護者から直接話しを聞く時間

この時間を十分確保しながら、段階をおって遊びが発展するようにプログラムを組みたいものである。その遊びの内容は

③感覚的な遊び（ブランコなどのゆれ遊具、トランポリン、水遊び、プール、砂遊び）

④生活体験のプログラム（買い物、調理、食事、お風呂、シャワー）

⑤集団で行うなら、音楽遊び

⑥散歩、施設探検

こういったプログラムが有効である。単発で実施していく場合は、⑥、③、⑤、④の順だろうか。散歩をして参加した障害児自身が施設を理解し、感覚的な遊びをする中で学生とコミュニケーションを取り、ここは楽しいというところということを理解し、音楽遊びによって集団を意識し、生活体験のプログラムによって、社会的な学習として宿泊体験をする。こういうプログラムの配列で、一番無理のない形で学生と障害児が宿泊を迎えられると思われる。

以上「将来、福祉に従事する学生に体験してほしいレクリェーションについて」と題して展開してきたが、ここでいう「レクリェーション」についてを明確にしておきたい。

レクリェーションは、労働と相対する中で、余暇時間における活動として定義されることが多い。今回の「レクでキラキラキラ」においてもその部分のレクリェーションも確かに存在する。プールでの水遊び。音楽遊び。こういったプログラムはその現れだが、現在、福祉の分野ではそういった意味だけでレクリェションを捕らえてはいない。

福祉レクリェーションを語る時、使われる言葉は、「生活の中の快」生活そのものをどれだけ心地好く、豊かにするか。その部分でレクリェーションが語られている。労働時間と対比する余暇時間の活動としてのレクリェーションだけでなく、生活そのものを豊かに、潤いを与えてくれる。そのためのレクリェーションの必要性。その内容。こういう実習をとうして、障害児と直接関わることで学生に感じとってほしいと思う。障害児が見せてくれる笑顔、そのしぐさ。保護者の語る生の声。それらの内容から、単なる遊びとしてのレクリェーションではなく、　生活を豊かにすることのレクリェーションを学生には感じとって欲しいと思うしだいである。

Ⅲ今後の課題

この合宿にあたり、「福祉レクリェーション論」の講義ではアセスメント・計画・実施・評価という過程を進行させながら実施していくものであることを学び、実際に障害を持った子ども達と関わって、レクリェーションを実施するにあたり、レクリェーションのイメージからすると、グループを活用して活動を援助、支援していくのではと考えがちであるが、あくまでも個人を援助、支援していくものである。福祉レクリェーション援助は、援助対象者のレクリェーション自立を最終到達目的に、アセスメントから評価までの過程を対象者とかかわりながら連続的に進行させながら実施させていくことを学んだ。

今後はわずかではあったがこの経験にさらに経験を積み、「生活のレクリェーション化」食事や入浴、排泄等の主にADL（日常生活動作能力）に関する生活部分に遊び心を付加すること。例えば、食事の時に音楽を流す、きれいなテーブルクロスを掛ける、花をいけておく、等、楽しく食事ができるように工夫してみる。「レクリェーションの生活化」レクリェーション活動が、生活の中に大切な生活の一部として意識され、組み込まれていること。例えば趣味としてスポーツや文化活動等、生きがいとなるものが日常の中に組み込まれているか等、福祉レクリェーション援助計画に限ったことではないが、援助、支援者が一方的に計画を立てるのではなく、対象者が意思を伝える能力を持ち合わせている場合には、本人の意向を最大限に取り入れながら双方向で検討し計画していってほしい。対象者のその時の生活状況に応じて、福祉レクリェーション援助計画も「生活のレクリェーション化」が最優先される計画から「レクリェーションの生活化」が可能な計画まで、連続的かつ柔軟に計画できるように学習していって欲しい。

また、自分自身の生活の中にもこのような要素が入っているか。「生活のレクリェーション化」「レクリェーションの生活化」についても考えて見ること、まずは自分自身が遊び心をもち楽しい日々が送れているかが大切なことである。

レクリェーションを指導していく立場として、自分自身も含め楽しい生活が送れているかは重要なことである。学生に指導してこのようにあれと説いている本人が楽しくないレクリェーションを指導していたのでは第三者に伝わらない、考えさせられたプログラムであり、楽しい福祉レクリェーションの授業ができるように「福祉」とは何か再度考えてみるよい機会であった。

今後の福祉レクリェーション援助を進めていくにあたって、1つには「個別化」「多様化」への対応を考えておく。皆で楽しむプログラムや、個人の嗜好や意向を大切にしたプログラム等選択可能なプログラムを提供できるように配慮する。2つ目には環境整備の改善、開発は大きな課題であろう、人の手を貸す、差し伸べるということだけで援助できない部分がある。バリアフリー環境の整備によって障害者の自由なアクセスを保障することができる。3つ目には援助を行う人材の問題である。加齢や障害をマイナスの要素と考えるのではなく、内にある可能性や能力を生かしていきいきとした余暇生活、一人一人のより良い生活の実現を支援、援助活動を進めていける、専門的知識や技術を身に付けた専門職の有無が重要になる。特に3つ目は本学においては福祉臨床学科の学生の課題である。

おわりに

高度経済成長をへた1970年代にはいってノーマライゼーションの思想が日本にも浸透しはじめ、レクリェーションが「権利」として認識されるようになってきた。

1970年から80年代は、高度成長がもたらしたさまざまな社会的歪みが問題となった時期であった。公害による環境破壊や地域社会の崩壊による人間関係の希薄さが、あらためて「人間らしい生活とは何か」へと関心を向かわせ、心のゆとりや楽しみ生きがいの必要性が意識されるようになる。物から心へと人々の関心が移っていった。そうした流れの中で、レクリェーションや余暇の充実が、

すべての人々の豊かでゆとりのある生活の実現に不可欠なものとして、あらためて社会福祉の課題として浮かび上がってきた。

障害者においては、1981年の国際障害者年以降、旅行やスポーツ、アウトドアー活動、文化芸術活動など、障害者の遊びの範囲は広がってきた。今までのように障害があるからできない、がまんする、ということではなく障害があっても健常者と同じようにさまざまな余暇活動を自由に楽しむにはどうすればよいかという方向へと、障害者の意識もまた社会全体の認識も大きく変わってきた。

21世紀は余暇をいかに楽しく生きるかが課題である。そのためには自分自身も楽しめる生活プランを持っている事と、よき福祉レクリェーション援助ができることが今後のかだいである。本学学生と共々頑張っていきたい。

最後にこの合宿を実施するにあたり神戸養護学校の田中一行先生と本学の石岡由紀先生に協力いただき感謝もうしあげます。

参考文献

＊園田碩哉・千葉和夫・他７名『福祉レクリェーション総論』日本レクリェーション協会・2002年
＊千葉和夫・小池和幸・他７名『福祉レクリェーション援助の方法』日本レクリェーション協会・2002年
＊浮田千枝子・池　良弘・14名『福祉レクリェーション援助の実際』日本レクリェーション協会・2002年
＊日本レクリェーション協会編集『やさしいレクリェーション実践』2003年
＊硯川眞旬『学びやすいレクリェーション援助』金芳堂・2002年
＊佐野　豪『高齢者のためのレクリェーションワーク』不昧堂出版・1995年
＊一番ヶ瀬康子『福祉現場のレクリェーション実践』一橋出版1999年
＊鈴木秀雄『セラピューティックレクリエーション』不昧堂出版・1995年
＊福岡　寿『コーディネーターがひらく地域福祉』ぶどう社・2002年
＊一番ヶ瀬康子・川畠　修・小林　博・園田硯哉『福祉文化論』有斐閣ブック2001年
＊三好春樹・上野文規・下山名月『遊びのリテーション』雲母書房・2002年